

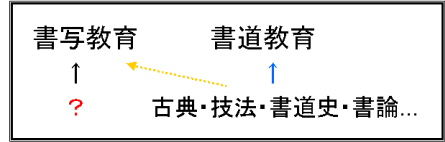
書写・書道の学習内容論・教材論などについて

上越教育大学学校教育学部 押木 秀樹
 千葉大学教育学部 樋口 咲子

1. 書写書道教育における内容学と内容論の問題

1-1 書写の内容学と内容論

- ・ 「教材・内容＝手本」という発想からの脱皮の必要性
- ・ 「？」にあたるものは、何かというところからのスタート。
- ※ 書道教育の内容論よりも書写教育の内容論が多く検討されてきた理由としても



■ **一般の内容論** 学習目標を達成するために:
 ■ 既存の知から、何を選び何を伝えるか？(内容論)
 ■ どのような形で伝えることが、効果的か？(教材論)
 ■ どのような活動が、学習者の力を伸ばすか？

1-2 一般の内容論と書写の内容論

- ・ そのため、特殊性が発生している。 →

■ **書写の内容論** :内容学を兼ねる必要性
 ■ 上記の内容
 +
 ■ 「既存の知」にあたる部分 (前ページの「？」)

1-3 内容論の模索

- ・ この間、「学習項目」が明確にされ、手本などに内在する要素が抽象化されて「学習内容」となり、成果は『書写指導』に生かされてきた。

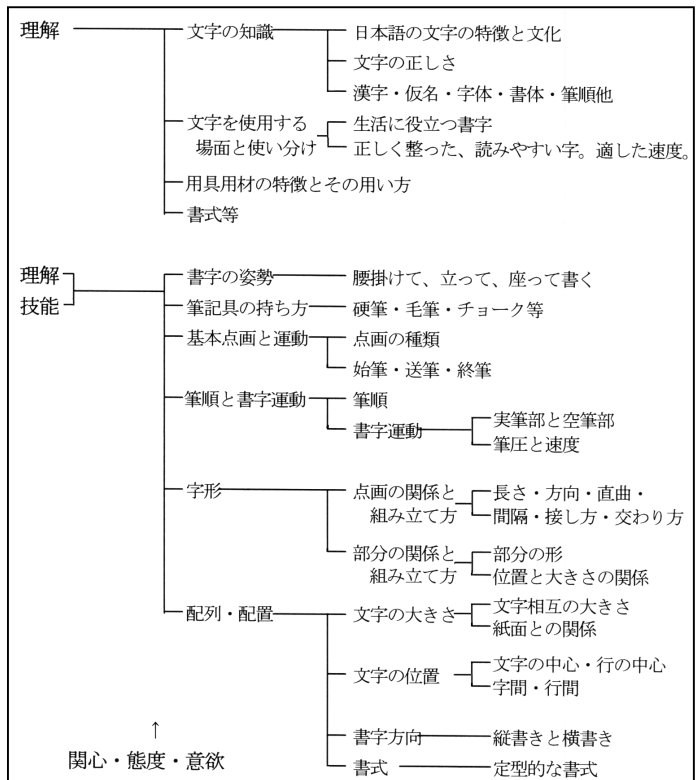
2. 理論面からみた成果と課題

2-1 項目の整理「何を学ぶのか？」

- ・ 『新編 書写指導』より →
- 各項目の再チェック：部分からなる字の構造・行書の動きの部分など
- 文字を手書きすることの意味・意義など(文字の使用場面の变化など理解面)
- コミュニケーションとして見た際の、非言語的要素の項目化の可能性

2-2 法則性・規則性「どうすると良いのか？」

- ・ 既存の規則・法則の洗練と深化
- 漸増・漸減などの問題はよいのか？
- 誘導場理論等の応用はしなくてよいのか？
- ・ 現代的の書字環境への対応 (例：宮澤)
- 筆記用具の学習内容は？
- 横書きの文字位置・字形などはどうあるべき？
- 使用場面の变化に対する対応は？
- ・ 動きに関する部分



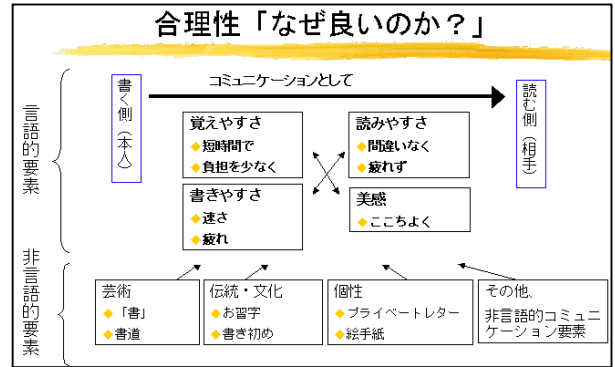
例

- **点画の長短**
 ■ 等長と一画強調系(長さを等しくする。一画のみを長くする。)
 ■ 例外：長さにより字種の識別をしているもの(土・土、未・未)
- **点画の間隔**
 ■ 等間隔：複数の同一方向の画が並ぶ場合は、等間隔にする。
 ■ △間隔造は広めに、開構造は狭めに(「事」の口部分など)
 ■ △漸増・漸減系など

- 姿勢・持ち方の学習内容化 (見本の提示こととまらない学習の工夫)
- 書字動作 (硬毛の運筆・用筆と基本点画の関係も)
- 速く負担のない書き方 (行書)

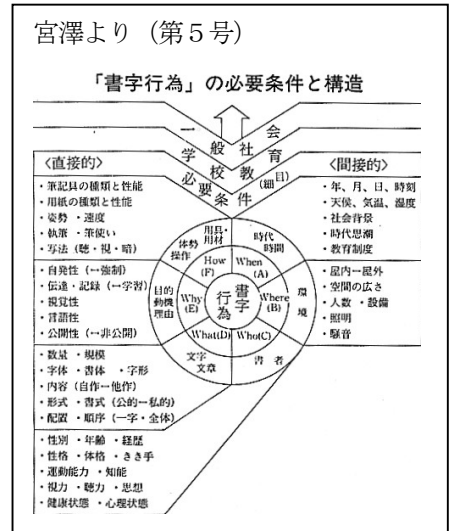
2-3 合理性「なぜ良いのか？」

- ・ 例 →
- ・ 「なんで書写なんかやるの?」「なんで~ (例: 筆順) なんて、憶えなくちゃダメなの?」という声に答えるためにも。
- ・ 有用性・難易度・真理芸術性という視点の提示。
- ・ 「読みやすさ」だけにとられることなく、書字活動における「書きやすさ」などの視点の明確化。
- ・ コミュニケーションとしての「書く側」と「読む(見る)側」の意識化。
- ・ 非言語的要素の明確化。など。



2-4 汎用性「どれだけ効果的か？」

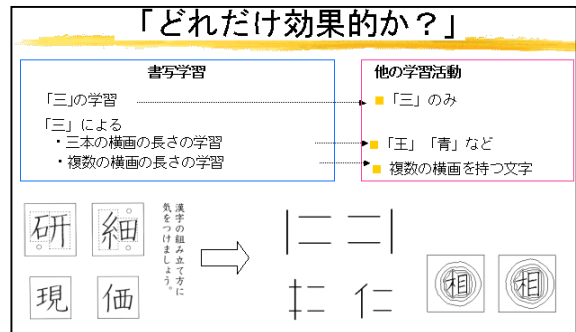
- ・ すでに、『書写指導』等に生かされている部分と、そうでない部分について。検討の必要。(平形の理論など) 例 →
- ・ 理論の一般化。



2-5 書写の他領域との関連から

- ・ 目標論 (課程論) との関係から
 - 非言語的要素は、学習内容になりうるか
 - 毛筆の位置づけと学習内容について
- ・ 学習者の実態との関係から
 - 書写学習の意図の理解の必要性
 - 書字速度の学習内容と学習段階
 - 中学校卒業段階での問題点
- ・ 授業過程との関連から
 - 学習内容の難易・有効性と、学習順序など

2-6 他領域の知見を生かして 例 →



例: 脳の科学との共同研究の必要性

例: Kimihiro Nakamura, ...Hiroshi Shibasaki, 2000, Participation of the left posterior inferior temporal cortex in writing and mental recall of kanji orthography, Brain, 123, No.5, 954-967

文字の記憶における運動性の記憶について

意識的素地動作と無意識的書字動作について

毛筆学習による硬筆の書字能力への転移の可能性について

- 一点一画、注意して書きましょう。
- (大脳で?)文字を書くことに意識を集中して練習

↓

- 文章を書くことに集中すべきとき
- 内容を意識して、文字を書くことはできるだけ無意識的な動作としておこないたい。

3. 実践面から見た課題

3-1 基本的問題

- 書写で学習したことが、まだ日常に生きない。
 - ・ 長い画と短い画があることがわかった ←→日常ではみな同じ長さにしてしまう。
 - ・ 学習した原理原則を記憶し定着させるための教材の必要
- (配列などに関する) 原理原則を深化させる必要がある。
 - ・ 何度も繰り返し書いているうちに行が整ってくる、といった従来のお習字的授業になってしまう。
- 言葉に対して技能的になっていいのか?

- ・ 言葉に対する各人の背景（イメージ）というものがある。書く行為につなげるための教材づくりの必要性。
- 小学校1年の入門期、文章と文字の両方を整えるのは無理という意識が担任の先生方にはある。
 - ・ 字形を整えることを国語の中に入れていくことが必要。
 - 認識するために文字を書く・定着するよう文字を書く・表現するために文字を書く・伝達のために文字を書く・・・これらの教材の違いは？
- 日常生活の中で「書き写す」（視写する）だけの場面と、書き進める（文章を書く）場面を想定した書写力と書字力を考えるべきではないか。

3-2 字形・字体の基準についての問題

- 平仮名の指導の際の標準字形は必要か？
- 硬筆で書くための字形は毛筆文字をもとに書かれてきたが、その見直しの必要はないか？
- 各自が課題を選択する学習内容の場合、基準となる教材は。
 - ・ 俳句や詩、招待状など日常のものを各自書かせる授業では、基準となる文字がないので正否・適否を確かめることができない。したがって自己評価もしづらい。どんな教材がよいのか。

3-3 毛筆に関係する問題

- 毛筆使用が有効な教材とそうでないものを整理する必要がある。意味もなく毛筆を使用しない。
- 毛筆は「学習用具」という位置付けにとられすぎて「筆記用具」であることを忘れてはいまいか。硬筆だけ学習しても毛筆は上達しない。
- 半紙にとられすぎた（教科書）教材が多い。

3-4 動作・運動に関する問題

- 硬筆の持ち方や、書く際の動きについて
 - ・ 少ない疲労で、長時間リズムをもって書き進むための方法。書写リズムの習得法

3-5 時代や環境への対応に関する問題。

- 横書きの教材開発 → 文字の「横の中心」とはどこか

3-6 中学校段階の問題

- 行書の定着度が低い → 行書の必要性を理解させる教材
- 中学生の疑問として、「なぜ、今、平仮名の練習をするのか」というものがある。それに応える教材になっているか。

4. 書道教育の内容論・教材論

- ・ 教材観の変化
 - 書の古典だけが教材か？ ・ 漢字仮名交じりの教材とは？
 - 線質・太細・濃淡…といったとらえ方は？
 - 表現したいもの・伝えたいものは教材として成立しないか？
 - 活動を学習内容としてみたときのとらえ方は、ないだろうか？
- ※ 生徒の関心のないところで話が進んでもしかたがない。今の、現代のありかたを見つめた指導が必要。その一方で、芸術としての鑑賞眼・表現力を身につける指導が必要で、この両立が難しい。これまでの古典に頼ってきた指導法を改めなければならない。理論的な字形や構成の研究・指導の必要。→教材の必要（用具用材・構成・線質など工夫が見られるが、字形が弱いことはないか。重心の位置を変えるなど）。